

我思われる、ゆえに我あり：他律の心理

高森 淳一

1. 学生食堂での一情景

昼のご飯どきをすぎた、ひともまばらな学生食堂のことだ。遅がけの昼食をひとりでとっていたのだが、離れた斜め前のテーブルでは、運動部の部員らしき長身でがっしりした体格の男子学生が、やはりひとりで食事をしていた。

そこに、スポーツウェアを着た3、4名の男子学生の集団が来合わせた。そのうちの一人が、唐突に、無言のままニヤニヤしながら、食事をしていた学生に向かって、大仰な身振りで指差しはじめた。知り合いなのだろうか、何か良からぬ行為を見咎めたのだろうか、それにもしても、この妙にニヤついた表情はなんだろう。

状況が飲み込めないまま、成り行きを見ていたが、指さされた学生は、相手の言わんとするところが即座に分ったようで、困惑した表情を浮かべながら弁明をはじめた。誰それと一緒にだったが、誰はあんなで、彼はこんなで、別々になって、今たまたま一人で食事をしているだけだ。

この釈明を耳にしてはじめて、ああそうか、無言のうちに取り沙汰されていたのは、ひとりで食事をすることだったのか、と了解した。

後から思えば、あの妙なニヤニヤには、恥かしい場面を目撃したぞ、弱みをつかんだぞ、といったニュアンスが含まれていた。むろん、指さしている学生のほうは、冗談めかしてやっていたわけだろうが。

ひとりで食事をすることにさしたる痛痒を感じない者にとって、このやり取りはじつに印象深く、そしていささか奇異でもあった。

2. ランチメイト症候群

その後、ランチメイト症候群なる言葉の存在を知った。一応は精神科医が言いだしたものらしいが、ジャーナリズム用語と考えてさしつかえない。すでに6、7年くらい前からマスコミに取り上げられているらしい。大学生やOLなどの若い女性に多く、

学校や職場でお昼と一緒に食べる友人がいないために、昼休憩の時間がひどくつらいのが、その特徴だという。程度のはなはだしい場合、登校、出勤できなくなる。

そう言われれば、学生相談室にも、ランチメイト症候群と言えそうな女子学生が来談する（男子学生にもそうしたひとはあるのだろうが、今のところ、会ったことはない）。

ランチメイト症候群にかんして、集団心理としては村八分心性、個人心理としては孤独への耐性の欠如が論及されている。しかし、その議論はどうも正鵠を得ていないと思われる。

それというのも、まず集団力動として、これを村八分ないしはイジメなどに見られる積極的な疎外とは考えにくいからだ。中学生の女子グループなどでは、集団の凝集性が高く、休憩時間、お手洗いにゆくにもグループの友人と連れだって行く。しかし大学では、部活動などを除きそうした集団凝集性が低いため、積極的な排除自体が機能しづらいだろう。

いや、昨今の大学生活で、とくに女性の場合、グループへの帰属がずいぶん一大事であることを知らないわけではない。また集団の内外の区別が著しく、授業で資料などを配布しても、自分たちのグループのメンバーにだけは親しげに手渡すが、その後は、そこらに放置するため、資料が全体に行き渡らないといった現象も見知っている。

それでもやはり、グループ内での人間関係はいざ知らず、グループ外の特定個人を積極的に排斥しようという気配は感じられない。孤独感や疎外感といった主観は、つねに客観的な排斥状況から生じるというわけではない。

ランチメイト症候群とされる個人の心理については、「ひとりでいられる能力」が不十分なために他人を希求するが、他方、対人スキルの稚拙さから集団に参入できないとされる。周囲が楽しげに歓談しながら食事をしているなか、ひとりだと淋しく感じ

ることもあるだろうし、元来友人が少ないと自覚させられて感傷的にもなるだろう。こうした心理は一昔前の人間にもわかりやすい。

しかし最近の学生の懊惱は、それとはだいぶ違った様相を呈している。苦痛の源泉はひとりで食事をすること自体にもあろうが、それ以上に、ひとりで食事をしているところをひとに見られることにあるようだ。この場合のひとというのは、多少見知った知人のことを指す。そういう意味では、学内に知人が絶無というのでもない。

気がかりは、友人が実際に少ないかどうかということより、友人がいないネクラな奴とみなされることのほうである。彼らにとって、ひとりで食事する場面を見られることがあるまじきことなのだ。「見るなの禁」ならぬ「見られるなの禁」を自らに課しているようさえある。構内が狭くて適当な隠れ場所がないような大学では、お手洗いでひとり食事する人さえいる。

3. 他者による自己の構成

青年が他人からの視線を気にして、カッコをつけ、良く見せよう、良く思われようと背伸びをすることには、今も昔も変わりがない。

しかし、その心性において根本的に違っているのは、実像と虚像の比重が反転していることであろう。

かつての青年では、他者からよく思われようと、理想の私（理想自我）と現実の私（現実自我）とのギャップを埋めるべく、現実の自分を向上させようと強迫的に努力し、容易に埋まらないギャップに悩むということが、しばしば見られた。

しかし、近年では、一見したところ現象的には強迫的と記述できそうな場合でも、自分が優等であるかどうかより、優等と見えるかどうかに腐心しているのが実際だ。

友人関係も同様であろう。ランチメイトがいる学生であっても、その実、友人がいることよりも、まずは友人に囲まれた社交的でネアカな人間と見られることのほうが重要である。下手をすると、ランチメイトは相互のアリバイづくりに役立っているだけということもありそうだ。ひとに見せるための友人、自分を飾るための友人、ランチメイトがいることを

証明するための友人である。友人がいかなる人物なのかは二の次だ。

実際のところ、社会全般、とりわけ若年層において人間関係が希薄化してきていることは、誰しも認めるところだろう。しかしその一方で、青年の主観においては、親しい友人がいるのは当然で、いない奴はダメ人間、という潜在的な固定観念があるようだ。

少し誇張して言えば、まどみちお作詞の「一年生になったら」のような世界が暗黙の前提である。学校に入れば友達が百人できて、友達百人と富士山のうえでおにぎりをパックン、パックン、食べる、そんなヴァーチャルな世界。しかし、むろん各自の現実はそれとは隔絶していることをどこかで知っているから、底が割れないように、みんなで現実を糊塗し、友達いっぱいの世界を演出すべし、という黙約があるかのようだ。

こんなことをいうと現代青年がやけに欺瞞的と思えようが、実は偽装、粉飾、瞞着は、現代社会の通弊である。

世間に目を轉じれば、その手の事件は数々列挙できる。マンションの耐震偽装にはじまり、カネボウ、ライブドアの粉飾事件、記憶に新しいところでは船場吉兆やら赤福、三笠フーズ、あとはもういちいち枚挙に暇がないくらいの食品偽装。こうした粉飾、偽装事件の続発を考えれば、社会の根幹と言っては誇張にすぎるが、少なからぬ部分が偽装によって成り立っているのかもしれないという気になる。

また、こうした偽装、欺瞞がいくらもまかり通るのは、世間のひとが実際の内容をろくに見もせず、外見やら肩書やらといった、見てくれただけでひとや物事を判断しがちなためだろう。

「吉兆の味も信心から」。名の通った高級料亭であって旨いと思われている以上、今、俺が口に入れたこの天ぷらも旨いにちがいない。これでは、実際の味なんぞ無関係である。「この味がいいね」と君が言ったから、この味たぶんいいんだろう。

そこにあるのは自己感覚の空洞化である。自己の実感は判断基準とはならず、他人の顔色がそれに置き換わっている。他人といつても特定の人物ではなく、相互に他人の顔色をうかがいあっているのだ。

これはまた、現代青年における自己認識にかんしても同様である。自分を考えるに際して、たえず他者のまなざしを通して、自分を見る。自分が自分のことをどう考えるかではなく、他者からの判断がそのまま自己存在を規定する。ひとが自分を社交的だとみなせば、自分はそうした人間である。逆にネクラだと判断されれば、自分はネクラ人間なのだと自己規定する。

ひとが自分のことをどう思おうが、自分とはこういう存在なんだ、という安定した自己認識が欠落している。自己存在の根拠は他者の手、いな他者の目に委ねられている。約言すれば、「我思われる、ゆえに我あり」。Esse est percipi（存在することは見られることである）。

4. 他律の心理

「我思われる、ゆえに我あり」の我イメージは、場の規定に応じて、その色合いが不定に変幻する。こうした自己状態はカメレオン様アイデンティティと呼べるだろう。

しかし、その内実はアイデンティティ＝同一性という観点からは理解しづらい。それというのも、同一性形成の不全として、否定的にしか記述しえないからである。エゴ・アイデンティティという考えには、社会の側から自己へ向けられる存在規定も視野に入っているが、自分が能動的に行う自己定義、つまり対自関係に比重がある。

従前の心理学は、「閉ざされた個人」(homo clausus)、つまり孤立した審級としての自我を当然の与件とし、その内面を探索しようとするアトミズム的発想に繫縛されていた。

しかし他者のまなざしによって構成されるような自己は、自己完結的で自律的なモナドとして実体論的に表象するには、あまりに流動的だ。関係論や社会構成主義が隆盛するゆえんである。

現代の青年は、等身大の自分に確からしさを抱けずに、他人の観念のなかにあると想定される仮想の自己像に傾注し、たえずこの仮想存在を意識する。しかも他人に写る自己像を美化するのに実像を変化させるより、鏡像そのものを変化させようとする。喻えて言えば、鏡を見て髪型の乱れに気づいた際、

自分の髪の毛を整えるのではなく、鏡にマジックで黒く描き足すみたいなものだ。

そのため、本来の自己存在のほうはおろそかになる。それでますます自己の実在感は希薄となる。そうすると希薄化した自己を補うべく鏡像の美化にいっそう傾注することになるという悪循環が生じる。

従来の心理学では自己のなかにある他者性が問題であった。それは学派によって、欲動だったりコンプレックスだったり力への意志だったりした。しかし、ここで問題になっているのは、他者の中にある自己性である。

かつての青年の自己構造が自律型であったとすれば、近年のそれは他律型である。

さらに実態に即して考察すれば、自己を構成する他者のまなざしは、実は自己像を映しだす手前すでに自己に汚染されている。事態は複雑だ。自己の脳中に想定された他者の意識に写る自己像が問題なのだ。そこでの他者はあくまで自己と相対している他者、自己の他者であって、自己から独立自存の別の自己とはみなされていない。他者は根本において自己に回収されている。

以上のような問題をひとくちにいってしまえば、自己愛の問題ということになる。他人から称賛を搾取しないと自尊心を保持しえない誇大型も、ひとかのささいな批判にも容易に傷ついてしまう過敏型も、根本的な自己構造は、ここで論じた他律性を構成原理としている。誇大型は他者からのまなざしに満悦したままの裸の王様であり、過敏型はゴルゴンの邪眼に射すくめられた犠牲者である。

今後、社会全体が確固たる内的な価値観を見失い、実現すべき理念も欠いたまま、皮相を上滑りに滑つてゆくならば、成果主義、功利主義といった外面重視の風潮はいっそう助長されるだろう。そうなれば、是が非でも、こうした他律の心理は拡大してゆく。

それに対して、特段の心理的処方箋もないのだが、「人は人吾は吾なりとにかく吾行く道を吾は行くなり」という西田幾多郎の和歌は銘記するに値するだろう。

と言った先から、「そんなことできれば世話ないよ」という青年の不当とはいえない鋭い「ツッコミ」が傍らから聞こえてくる・・・。